

新潟脳神経研究会特別例会の御案内

日時：令和8年6月16日(火) 15:30～16:30

場所：脳研究所 A棟 1階 検討会室

“食べる”から見る霊長類の環境適応 — 行動・身体・腸内細菌の多面的戦略 —



山崎 由美子 先生

新潟医療福祉大学
心理・福祉学部心理健康学科・教授

動物にとって食べることは、生命維持のために最も基本的で、欠くことのできない行動です。それぞれの動物が選択した生息環境で、何を食べ、必要な栄養素を確保するかという問題は、身体の形や機能の進化に対し重要な影響を与えてきました。本セミナーでは、霊長類が発達させた採食様式や、採食のための形態的・機能的特徴を取り上げ、環境への適応の仕方にどのような共通点や相違点が見られるかを考えたいと思います。

ヒトは今や多彩な道具を使いますが、最初期の道具は食料となる肉や植物を処理するという目的のために使われていたようです。ヒト以外の霊長類で現在道具を使うことが認められている種にはチンパンジー、オマキザル、マカクサルなどがいますが、その多くが食物を得るための道具です。ブラジルのオマキザルは、自分の体重の約 1/3 に達する重さの石を使って実をたたき割ります。タイのカニクイザルは場所や用途に適した物体を、食物処理のための道具として選びます。こうした行動はどの個体にも示されるわけではなく、一朝一夕に獲得されるものではなく、生後、繰り返しの学習をすることが必要になります。積極的な教育は見られないものの、若い個体は仲間の行動を観察して練習を重ねます。行動的なコストは非常に高いですが、獲得した場合の栄養摂取のメリットはそれを上回ります。

ブラジルのマーモセットは樹液食を維持することで、植物や昆虫が乏しくなる乾季にも、安定的な栄養摂取を可能にさせています。その背景には 300g 程度の比較的小型の体格や、樹幹にしがみついたのかぎ爪という、樹液食に有利な身体的特徴を有していることがあります。私たちは、野生のマーモセットにおいて、乾季と雨季での腸内細菌叢を調べ、季節ごとに細菌叢の特徴を変化させていることを明らかにしました。こうした例は、行動、形態、機能を通じた霊長類の柔軟な環境適応を裏付けるものと考えられます。

どうぞ奮ってご参加ください。

(担当：脳研究所 動物資源開発研究分野)

